

在籍者数からみた島根県の障害児学級の現状と展望

西 信 高*

Special classes in ordinary schools in Shimane Prefecture considering
from the enrollment of mentally handicapped children

Nobutaka NISHI

はじめに

79年度（昭和54年度）の養護学校義務制実施にともなって、島根県でも、3校のちえおくれを対象とする養護学校が新設された。それからすでに8年が経過し、来春（88年）には、当時小学部1年に入学した子どもも卒業することとなる。

この間、ちえおくれを対象とする障害児学級の比重は相対的に低下し、法制的には対象児を異にしているとはいえ、一般論として、とくに教育内容・方法の面では障害児学校にリードされる傾向にあるという印象を受ける。

これは、点在する障害児学級に比べ、障害児学校の場合、日常的に教師集団が組織されており、また市町村と県という設置主体のちがいによる財政的な基盤の差なども影響していると考えられる。

今後障害児学級はどのような方向にすすんでいくのか、またすすむべきか。

このことが厳しく問われ現実的な課題として浮かびあがってくる日も、それほど遠くはないと考えられる。

そのような問題意識のもとに、ここでは学級数および在籍者数の推移など、数的側面から現状を把握することを中心に、それとかわる若干の問題について考察する。

I. 障害児学級数の推移

1. 島根県の特徴

表1¹⁾は、島根県における「特殊学級」（以下障害児学級）数の年次別推移である。

これをみると、60年度（昭和35年度、以下「昭和」はSと略記）を境として急増している。

ちょうどこの時期、島根県において、上田はちえおくれを対象とした障害児学級の実態調査をおこなっている²⁾。

当時、この急増傾向がどのように評価され、また問題点が指摘されていたのか、上田の報告をもとに以下に述べる。

まず上田は、この傾向を評価して、「かくして本県の精薄児学級は35年度を以て、急激に膨張し、精薄児教育はここに新段階に入ったわけである。ひとえに関係諸機関の努力のためのものであり、以上の施策が本県特殊教育の振興に果たした役割はまことに大きいものがあったと云わねばならぬ」という。

* 島根大学教育学部障害児研究室

表1 島根県内障害児学級数の推移

年度	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45
小学校	0	5	5	5	10	9	6	5	7	9	36	40	40	46	52	64	73	84	106	112	117
中学校	1	2	2	2	2	2	4	3	4	6	24	27	28	34	40	52	61	69	82	94	96
合計	1	7	7	7	12	11	10	8	11	15	60	67	68	80	92	116	134	153	188	206	213

大久保ら¹⁾による

ここにいわれる「以上の施策」とは、児童・生徒数800名以上の小・中学校に1学級以上の「特殊学級」を設置する方針を県がうちだした(1960)ことを指しているのであるが、たしかに、ちえおくれについて小・中あわせて、前年度11学級・141名から60年度には54学級・507名と、量的増大が顕著である。そしてこの数は、県下の推定数の6～8%に相当し、前年度の全国平均2%を大きくうまわるものであった。

一方、質的側面にかかわって、上田は問題点も同時に指摘している。

「しかしながら反面、教育の実際面を担当する現場においては、急増にともなういろいろな障害も多かった。特に本年度(60年度一筆者)新設の精薄児学級にあつては、ほとんどの現場で未経験者がこれに当たらざるを得なかったので、精薄児学級として出発したはしたけれども、如何にしてその教育を軌道に乗せるかについて、困っているところが大部分である。そこでは編入児の判別、学級編成、学習内容、保護者の啓蒙、施設・設備等々の困難な問題が山積し、……」。

しかしながら、障害児教育の黎明期にあつた当時の

歴史的制約性にもよるが、そうした問題点として挙げられているもののなかには、その後の発展からみれば、むしろ積極的側面として受けとめるべきものもある。

たとえば入級に際して、「知能条件をきめているものの中では、IQ50以上75までのところが大半をしめ、一応これで良いと考えられるが、下限界については、50以下が相当多数をしめている。特に最下位よりとするものには、低IQ児の編入が優先的に配慮されているわけで、これには保護者の懇望や、学校側の同情、その他いろいろな主張もあろうが、特殊学級の教育効果の点からは問題が多い」(P.35)。

また表2のような調査結果を示しつつ、「二

表2 急増期の入級条件

		知能以外の条件					
		入 れ る		入 れ ない			
		数	%	数	%		
解 答	A	社会成熟度の劣るものは入れますか		27	(75.0)	9	(25.0)
	B	二重障害児は入れますか		16	(44.44)	20	(55.6)
	C	家庭の理解や協力のないものも入れますか		1	(2.8)	35	(97.22)
	D	知能はやや良くても学力の劣るものは入れますか		24	(66.66)	12	(33.33)
無答	6						
計	42						

上田による

重障害児を入れる方針のものが44.44%となっている。これでは後に担任がその指導に手を焼くことになりはしないか。……要するに精薄児学級については真性の精薄児を入級させるべきで……」(P.39)。

いずれにせよ、60年度を境とする急増は、障害児とその親の要求のたかまりによるものというより、行政による計画設置の方針が、直接的なテコになっていたことは事実である。いわば「からめ手」からのアプローチであった。

ところで、なぜにこれほど明確に時期を画して増加したのか。別な表現をすれば、なぜ県の方針の転換があったのか。

門脇らは³⁾つぎのように述べている。

「島根県では、昭和30年代に入って間もなくはじまった過疎の現象は、昭和38年の豪雪の後、一段と激しさを加えた。この過疎の現象は学校教育にも重大な影響を与え、人口減による児童・生徒数の減少は学級数減となり、教員数削減の圧力となってきた。また、空いた教室も数多く出現させた。……そこへ昭和35・36年から国・県の指導による特殊学級設置の勧めがきた。……それによって、昭和40年には5年前の約2倍の116学級、そのまた5年後の昭和46年には、また2倍の227学級となった。特殊学級を設置すれば、教員数をそれだけ減らさなくてもすむし、空いた教室もふさがる。そうした事情もあって、というよりも主としてそういう理由から、島根の場合特殊学級が設けられていったという事情の方が強かったと考えられる。」

そして同じく、みずからの調査結果をもとに、つぎのように述べている。

「特殊学級の新設が、当初の都市部主流から、昭和42年頃を境として過疎の進行とともに

に郡部主流に移っていくのである。無論人口の集中した効率のよい都市部から始めて、次第に人口の希薄な郡部へ及ぼしていくという行政の一般的趨勢が充分考えられるが、過疎の進行と郡部への新設があまりにも一致するのである。また、昭和37年度は新設の伸び率が僅かであるが、これは、この年度、新設費用に対する補助が少なかったためであり、この点からも、設置が行政主導型であったことを知る。」

高度経済成長政策のもと、人的能力開発の一環として軽度のちえおくれの子どもも位置づけられ、いわゆる特殊教育の振興が図られたことが基本となっているのであるが、戦後のベビーブームが過ぎ去って児童・生徒数の減少傾向がみられた全国的状況とあわせて、島根県では人口流出による過疎化の進行が、急増の大きな要因となっていたといえる。

2. 初期の障害児学級の状況

ところで、島根県における障害児学級の初期の変遷過程については、不明確な点が多い。

たとえば、学級数をみると、上田によればちえおくれを対象とする学級は小学校では1954年(S.29)に2校、中学校では1955(S.30)に1校それぞれ設置されたのが、はじまりとされている。

大久保らもこの資料を採用している。

しかしながら、これが誤りであることを示す資料は多々ある。

島根県教育委員会発行の「教育月報」(以下月報)には、すでに1952(S.27)8月号において、実践報告が載せられている。⁴⁾

①私の学級人員は、現在14名で精神薄弱児を対象にしている。学年は2年1名、3年4

表3 上田による年度別推移（年は昭和）

年度	小学校		中学校		特 殊 学 級				特殊学級のうち、精薄児を主とした学級			
	特 殊 学 級 総 数	特 児 を 主 と し た 学 級 の う ち の 精 薄	特 殊 学 級 総 数	特 児 を 主 と し た 学 級 の う ち の 精 薄	総 数	男	女	計	学 級 数	男	女	計
25			1									
26	5		2		9	67	38	105	6	52	29	81
27	5		2		36	194	158	352	32	164	131	295
28	5		2		6	46	25	71	5	37	23	60
29	10	2	2		24	151	95	246	22	131	81	212
30	9	1	2	1								
31	6	3	4	1								
32	5	3	3									
33	7	4	4	1								

9月号に掲載された当時の指導主事の一文から抜きだしたものである。

②一方、普通学校における特殊児の指導については、つとに浜田市原井小学校と八束郡宍道小学校がある。原井校は精薄学級と身体虚弱学級を設置し、実践と研究を重ね、……この他出雲一中、浜田二中に精薄の養護学級が設置され、特別指導に努力をつづけている。26年度には、もう、ろう、特殊学級担当者及び特殊教育に理解と関心のある人々により、島根県特殊教育研究会が発足しているので、……昨年度から特殊学級設置校について1名増員配置され……特殊学級もわずかに4校で将来大いに努力せねばならぬ。本年度W・S(文部省主催中・四国地区特殊教育研究集会一筆者)の報告をみると、12学級以上の小・中学校においては1学級20名程度の特殊学級を設置することが望ましい。教員配置も別枠とす

名、4年1名、5年5名、6年3名、知能指数はIQ38から75であって、大体興奮型が8名、安定型が6名である。

つぎの②は、同じく月報の53年(S.28)

るという結論がでていいる。松江市においても近く特殊学級の誕生をみることになりまことに喜ばしいことである。将来4市(浜田・出雲・松江および宍道町のことか一筆者)はもちろん、各地に特殊学級が編成されるよう努力したい……」。

また、月報の同じ53年(S.28)9月号に、「出雲市第一中学校」名で「本校特殊学級の経営について」が掲載されている。

③本校における特殊学級設置の胎動は、新制中学校発足とともにあった。昭和23年第1期生進路指導の際、精神遅滞その他の事由によって、社会生活不適應者及び就職出来ない生徒の一群が発見された。“この生徒等の将来を幸福ならしめるにはどうしたらよいか”と強く考えさせられた。

<昭和24年度>該当生徒に対する個人面接の実施該当生徒保護者懇談会。保護者11名出席。精神遅滞児の教育、特殊学級の設置について説明し、子弟の編入の諾否を求めたところ“特殊学級に入れると嫁にもらってもらえなくなる”“後指を指されてかわいそうだ”と全く親心らしい理由を挙げて強く反対、夕方になっても賛成者は1名しか得られなかった。この後10日間担任が該当生徒の家庭を訪ねて認識を広めるとともに承諾を求めて回り、ろ

表4 1954(S.29)5.1の状況

特殊学級数は小学校で10学級、中学校で2学級にとどまっている。						
小学校	{ 精薄 身体虚弱 混合 }	2学級	} 10学級	児童数	{ 精薄 身体虚弱 その他 }	19人
		6学級				232人
		2学級				8人
			(0.3%)			(0.2%)
中学校	精薄	2学級	(0.1%)	精薄	45人	(0.08%)

くろく相手にされないのに負けず説得してようやく8名の生徒を得て、これだけでも発足しようと5月9日特殊学級－(本校では養護学級と呼称)－は誕生した。

また、1954年(S.29)5月1日時点の調査結果が、月報1955年(S.30)4月号(P.31)に挙げられている(表4)。

つぎの④は松江市の例である⁵⁾。

④本校では、一昨27年頃から特殊学級の開設について話し合いがすすめられていましたが、遂に昨28年9月に開設の運びとなり、すでに1年余を経過しました。この学級は、母衣小学校のものというより、松江市の施設としての性格のもので、広く市内に呼びかけたのですが、結局その対象となった児童は、団体知能テストによる指数50以下の者を選び、中央児童相談所で診断を受けた結果、市内の他校からの2名を含む精神年齢6歳以上4名、6歳以下5名でした。学年別というならば、2・3・4年生で、これは年齢差がひどければ指導に困らるかと予想して意図的にそうされたことです。

ここで昨28年とあるのは、この号は1月号であり、おそらく原稿は前年の29年中に書かれたためであると考えられる。

いずれにせよ、これらの資料のみによって

も、戦後まもなくのころから、ちえおくれの子どものための学級を設立する動きがあり、ほどなくして開設されたことがうかがえる。現在および今後の障害児学級を考えるうえで、こうした時期の動向は参考になるが、この点についての詳細は稿をあらためて論ずる。

上記の引用において、本稿の目的からして不要な部分も含んでいるのは、そのような意図による。

しかし、③に端的に示されているように、60年(S.35)以降の急増期に至るまでの学級「数」からみた“低迷期”に、担任教師らが子どもの将来を思い、熱をこめて開設し運営していたのである。この事実は、島根県の教育における貴重な財産である。

II. 障害児学級在籍者数

1. 全国の推移

表5は、全国の障害児学級の年次別推移を示したものである。

図1は、表5をもとに障害児学級についてグラフ化したものであり、図2は同じく在籍者数をみたものである。

1979年度にはともに大きくマイナスとなっているが、これは、養護学校の義務制実施により、それまで普通学校の障害児学級で受けとめられていた障害の重い子どもが、養護学校へ転出もしくは新入学したためと考えられる。

表5 障害児学級数及び在籍者数の推移（全国）

年度	学 級 数						在 籍 者 数					
	小学校	増減	中学校	増減	計	増減	小学校	増 減	中学校	増 減	計	増 減
1950	602		49		651		17,513		1,655		19,168	
1951	712	110	118	69	830	179	20,146	2,633	2,865	1,210	23,011	3,843
1952	705	-7	133	15	838	8	18,744	-1,402	3,285	420	22,029	-982
1953	651	-54	155	22	806	-32	17,611	-1,133	3,093	-192	20,704	-1,325
1954	808	157	174	19	982	176	18,103	492	2,823	-270	20,926	222
1955	930	122	242	68	1,172	190	20,497	2,394	3,983	1,160	24,480	3,554
1956	1,004	74	314	72	1,318	146	19,765	-732	4,559	576	24,324	-156
1957	1,037	33	397	83	1,434	116	17,314	-2,451	5,755	1,196	23,069	-1,255
1958	1,253	216	538	141	1,791	357	18,621	1,307	6,670	915	25,291	2,222
1959	1,529	276	714	176	2,243	452	20,256	1,635	8,399	1,729	28,655	3,364
1960	2,029	500	908	194	2,937	694	24,406	4,150	10,430	2,031	34,836	6,181
1961	2,555	526	1,112	204	3,667	730	28,546	4,140	12,890	2,460	41,436	6,600
1962	3,203	648	1,374	262	4,577	910	34,339	5,793	15,885	2,995	50,224	8,788
1963	3,920	717	1,793	419	5,713	1,136	39,687	5,348	19,601	3,716	59,288	9,064
1964	4,667	747	2,367	574	7,034	1,321	45,848	6,161	24,719	5,118	70,567	11,279
1965	5,485	818	3,044	677	8,529	1,495	51,450	5,602	30,221	5,502	81,671	11,104
1966	6,429	944	3,838	794	10,267	1,738	58,206	6,756	37,238	7,017	95,444	13,773
1967	7,298	869	4,562	724	11,860	1,593	63,553	5,347	42,885	5,647	106,438	10,994
1968	8,067	769	5,222	660	13,289	1,429	68,749	5,196	48,245	5,360	116,994	10,556
1969	8,720	653	5,807	585	14,527	1,238	71,305	2,556	51,611	3,366	122,916	5,922
1970	9,290	570	6,250	443	15,540	1,013	72,676	1,371	52,971	1,360	125,647	2,731
1971	9,825	535	6,587	337	16,412	872	74,028	1,352	53,559	588	127,587	1,940
1972	10,562	737	6,768	181	17,330	918	77,603	3,575	52,663	-896	130,266	2,679
1973	11,706	1,144	7,002	234	18,708	1,378	81,652	4,049	52,081	-582	133,733	3,467
1974	12,550	844	7,133	131	19,683	975	82,882	1,230	49,823	-2,258	132,705	-1,028
1975	13,313	763	7,260	127	20,573	890	84,204	1,322	48,165	-1,658	132,369	-336
1976	13,786	473	7,223	-37	21,009	436	84,496	292	46,444	-1,721	130,940	-1,429
1977	14,129	343	7,196	-27	21,325	316	83,737	-759	45,223	-1,221	128,960	-1,980
1978	14,353	224	7,155	-41	21,508	183	82,126	-1,611	42,949	-2,274	125,075	-3,885
1979	14,083	-270	6,782	-373	20,865	-643	77,131	-4,995	38,580	-4,369	115,711	-9,364
1980	14,336	253	6,725	-57	21,061	196	76,398	-733	36,802	-1,778	113,200	-2,511
1981	14,622	286	6,689	-36	21,311	250	75,961	-437	35,394	-1,408	111,355	-1,845
1982	14,882	260	6,723	34	21,605	294	75,630	-331	34,938	-456	110,568	-787
1983	15,095	213	6,759	36	21,854	249	74,546	-1,084	34,205	-733	108,751	-1,817
1984	15,194	99	6,866	107	22,060	206	72,849	-1,697	34,383	178	107,232	-1,519
1985	15,095	-99	6,938	72	22,033	-27	69,629	-3,220	34,363	-20	103,992	-3,240
1986	14,845	-250	6,920	-18	21,765	-268	64,265	-5,364	33,283	-1,080	97,548	-6,444

文部省特殊教育課：特殊教育資料（1986年度版）により作成

図. 1. 障害児学級数の推移

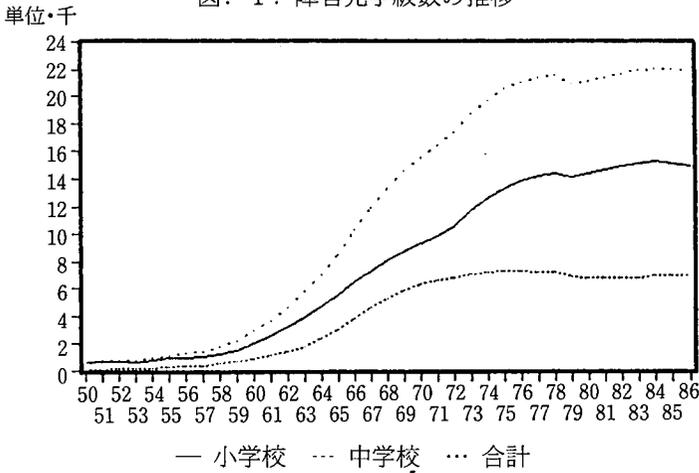
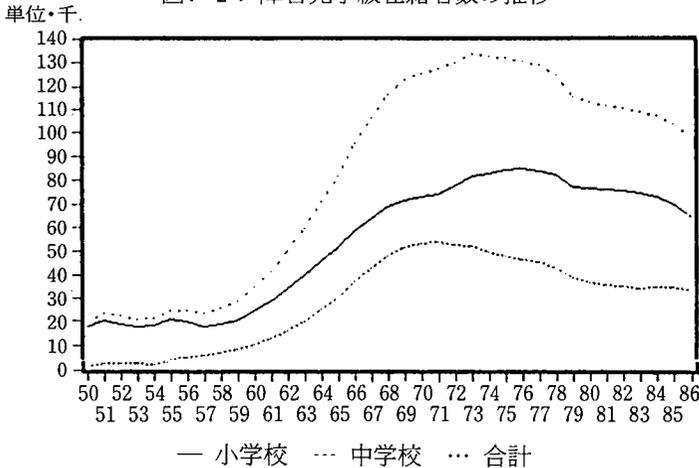


図. 2. 障害児学級在籍者数の推移



2. 島根県における推移

さきの全国の様子は、あらゆる障害を含めた全障害児学級に関する集計であったが、島根県についてみていくにあたってはちえおくれを対象とする学級に限定する。

これは、障害児学級の圧倒的多数がちえおくれを対象としており、また、他の障害の場合には別のさまざまな問題や特徴がからんで「数」のみでは現状を反映させにくく、個別に検討しなければ実態がつかめないと考えたことによる。

言うまでもなく、ちえおくれの場合にも通級制の導入など、やはり数値のみでは判断がむづかしい面もあるが、一応ここでは一定の傾向を把握することを考えている。

表6-a、表6-bは、小中学校それぞれについて一学

島根県においても、いわゆる施設内学級が79年度を境に廃止された例がみられる。

表10によれば、その後もひきつづき全体として減少傾向にあり、86年度は、79年度に次ぐ大幅な減少となっている。この表にはあげられていないが、最近各地で「ことばの教室」など、ちえおくれを対象としない学級は増設されている。したがって、この減少傾向は実質的にはちえおくれの学級によるものといえる。

級の在籍者数を示している。島根県に関する資料は、すべて当該年度の5月1日現在のものである。

表6の場合、82～86年は、たとえばNo.1の学級は在籍者が1名、2名、2名、0名（すなわち廃止）と推移していったことをあらわしている。ただし、70年および75年については、No.の欄は単に学級数の総計を示すために便宜的に記入したものであって、たとえばNo.1の学級は8名から6名へ変化した、というようには必ずしも対応してはいない。

図3は、この表にもとずいて、各年度にお

表 6 - a 島根県学校別障害児学級（ちえおくれ）在籍者数（小学校）

No.	70年 S45	75年 S50	No.	82年 S57	83年 S58	84年 S59	85年 S60	86年 S61
1	8	6	1	1	2	2	2	0
2	5	1	2	4	5	1	2	2
3	8	2	3	4	3	2	2	2
4	6	2	4	1	2	2	2	2
5	8	3	5	1	2	2	2	2
6	6	3	6	3	4	3	3	3
7	3	6	7	2	1	3	4	3
8	9	2	8	7	2	3	2	5
9	4	2	9	5	6	7	6	5
10	5	5	10	3	2	3	4	3
11	5	2	11	7	5	5	3	2
12	5	5	12	3	3	3	3	2
13	5	7	13	3	3	1	1	1
14	5	2	14	2	1	1	2	1
15	7	3	15	1	1	1	0	0
16	4	2	16	2	2	2	4	2
17	3	2	17	0	0	0	5	2
18	8	4	18	3	4	2	2	4
19	8	2	19	5	5	6	5	4
20	6	1	20	2	2	2	5	6
21	4	5	21	3	2	3	4	2
22	3	5	22	2	3	3	5	5
23	5	4	23	5	3	2	3	3
24	6	8	24	3	3	3	2	3
25	5	5	25	1	2	2	2	1
26	5	2	26	5	4	3	2	2
27	4	5	27	1	1	2	2	1
28	4	2	28	2	2	1	1	1
29	5	1	29	3	3	2	2	5
30	5	1	30	2	2	2	1	3
31	4	2	31	2	1	1	1	1
32	5	1	32	2	1	3	3	1
33	5	5	33	3	4	9	3	4
34	7	3	34	7	4	2	1	1
35	6	4	35	3	1	1	1	1
36	7	3	36	1	2	2	2	2
37	4	4	37	0	0	0	4	3
38	5	4	38	0	0	0	3	7
39	7	4	39	1	2	1	0	0
40	5	5	40	2	2	2	2	2
41	4	2	41	1	2	2	2	2
42	6	2	42	2	2	2	3	2
43	5	2	43	6	3	2	2	1
44	5	6	44	2	2	2	2	1
45	4	5	45	4	5	5	4	3
46	5	5	46	2	0	0	0	0
47	5	2	47	0	0	4	5	3
48	11	3	48	5	3	2	1	1
49	6	3	49	5	6	7	2	2
50	6	1	50	0	0	0	0	4
51	5	6	51	5	5	7	6.5	5
52	5	6	52	6	4	4	2	2
53	5	4	53	3	2	2	2	2
54	8	6	54	2	2	2	2	2
55	8	2	55	3	2	3	3	1
56	2	5	56	1	2	3	3	2
57	7	4	57	3	2	2	2	2
58	5	5	58	2	3	2	1	1
59	7	4	59	2	1	1	4	4
60	5	2	60	2	2	2	4	3
61	7	3	61	2	2	2	2	2
62	6	7	62	3	4	3	4	4
63	4	3	63	2	2	2	3	3
64	2	3	64	1	1	2	3	4

No.	70年 S45	75年 S50	No.	82年 S57	83年 S58	84年 S59	85年 S60	86年 S61
65	3	4	65	3	3	5	5	4
66	5	6	66	2	2	2	1	1
67	3	5	67	2	1	1	1	0
68	7	3	68	5	6	3	3	2
69	4	3	69	2	2	2	2	1
70	5	4	70	2	1	1	1	1
71	6	2	71	1	2	2	1	1
72	4	3	72	3	1	1	2	2
73	1	4	73	4	2	2	1	2
74	4	1	74	0	0	4	4	3
75	8	4	75	2	2	2	2	1
76	3	3	76	4	3	3	1	3
77	6	4	77	0	0	0	4	3
78	5	4	78	0	0	0	0	3
79	8	2	79	4	3	2	3	4
80	4	3	80	3	3	1	2	4
81	2	4	81	4	0	0	0	0
82	6	3	82	7	3	3	2	2
83	5	4	83	1	1	1	2	2
84	4	1	84	3	3	1	2	2
85	5	2	85	2	4	4	9	5
86	7	4	86	3	3	3	2	2
87	2	2	87	3	3	2	1	2
88	3	2	88	4	6	5	5	3
89		2	89	3	2	1	1	1
90		1	90	2	2	2	2	4
91		5	91	1	1	1	1	0
92		1	92	2	2	1	1	1
93		4	93	4	4	3	2	2
計	462	316	94	3	4	3	5	3
平均	5.25	3.39	95	2	2	4	1	1
			96	1	1	1	1	1
			97	3	2	1	2	2
			98	2	2	1	1	1
			99	3	1	1	1	1
			100	5	2	2	2	1
			101	2	2	0	0	0
			102	1	0	0	0	0
			103	3	6	2	2	2
			104	4	4	3	5	4
			105	2	2	3	2	2
			106	3	3	3	3	1
			107	2	2	1	1	1
			108	3	2	1	2	1
			109	3	1	2	2	2
			110	4	3	4	2	6
			111	1	1	1	1	1
			112	2	1	1	1	1
			113	1	1	2	2	2
			114	0	2	2	3	2
			115	0	0	0	1	1
			116	1	1	1	1	1
			117	2	2	2	5	0
			118	2	1	1	1	1
			119	2	2	2	3	2
			120	1	3	2	1	4
			121	2	2	3	3	2
			122	6.5	6.5	6.5	5.5	8
			123	3	1	1	1	2
			124	3	3	3	2	2
			125	1	2	2	2	2
			計	321	287	278	293	276
			平均	2.79	2.54	2.44	2.50	2.63

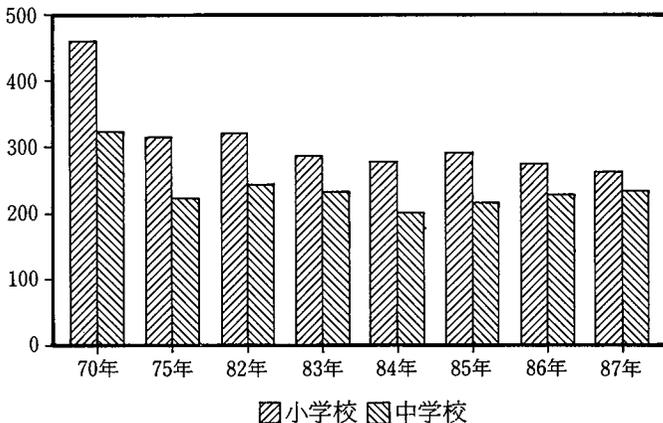
表6-b 島根県学校別障害児学級(ちえおくれ)在籍者数(中学校)

No.	S45	S50	No.	S57	S58	S59	S60	S61
1	8	4	1	7	6	4	3	6
2	9	5	2	6.5	7	6	5	5
3	8	4	3	4	4	4	3	5
4	5	1	4	6	6	6.5	8	8
5	4	5	5	6.5	9	11	7.5	11
6	10	2	6	1	1	1	1	1
7	4	10	7	2	2	2	1	1
8	6	4	8	2	2	1	2	3
9	10	6	9	2	0	0	0	0
10	9	8	10	8	5	7	5	6
11	6	2	11	1	2	1	1	1
12	5	7	12	10	8	3	1	2
13	6	6	13	3	4	1	2	1
14	6	5	14	2	4	1	2	2
15	4	3	15	1	1	1	2	3
16	4	6	16	7	3	5	6	5
17	8	7	17	4	2	1	2	1
18	5	2	18	3	5	3	2	4
19	5	2	19	4	4	8	9	7
20	8	3	20	1	1	2	2	2
21	5	4	21	4	1	1	1	1
22	5	3	22	2	2	2	3	2
23	3	4	23	4	1	1	1	3
24	5	8	24	1	1	2	3	3
25	11	4	25	4	2	4	5	2
26	5	3	26	5	4	2	1	4
27	9	7	27	2	1	1	1	1
28	5	7	28	5	6	6	6	4
29	12	3	29	4	2	2	4	4
30	3	1	30	7	11	5	4	6
31	3	3	31	7	6	3	5	10
32	8	4	32	1	2	1	5	5
33	7	5	33	1	2	1	1	2
34	3	2	34	1	0	0	0	0
35	5	7	35	4	4	3	4	3
36	3	1	36	4	3	2	4	6
37	7	3	37	3	2	1	5	4
38	4	4	38	5	2	2	3	3
39	7	4	39	2	2	3	4	3
40	5	5	40	2	2	1	2	1
41	5	2	41	1	0	0	0	0

No.	S45	S50	No.	S57	S58	S59	S60	S61
42	10	1	42	1	2	3	5	2
43	3	2	43	2	3	2	1	1
44	6	9	44	2	2	3	2	1
45	3	4	45	1	1	2	2	2
46	5	2	46	8	13	7	7	4
47	4	3	47	7	5	7	3	7
48	5	4	48	3	3	2	3	1
49	5	1	49	3	1	1	1	1
50	3	3	50	2	2	2	2	2
51	7	2	51	4	2	1	2	2
52	7	4	52	2	3	2	2	3
53	6	3	53	4	3	4	4	4
54	8	5	54	4	5	3	1	5
55		5	55	3	4	4	3	6
計	322	224	56	2	1	2	3	4
平均	5.96	4.07	57	1	1	1	3	2
			58	1	1	3	3	1
			59	1	3	2	2	1
			60	1	3	6	5	3
			61	0	0	2	2	2
			62	3	5	3	3	1
			63	1	1	2	1	2
			64	3	3	2	1	2
			65	1	2	2	2	3
			66	2	2	1	3	2
			67	1	2	2	2	1
			68	2	1	1	1	2
			69	2	1	1	1	1
			70	2	2	2	1	1
			71	2	2	0	0	0
			72	0	0	0	0	1
			73	1	0	0	1	2
			74	2	1	1	2	3
			75	5	4	1	0	1
			76	4	3	1	2	2
			77	1	2	1	1	0
			78	7	7	7	9	6
			79	1	1	1	1	1
			80	2	1	1	2	1
計	244	230	200	216	227			
平均	3.12	3.10	2.70	2.91	3.02			

*平均は、数値0である学校を除いて算出している。
 *82-86年は一つの学校Noは同一校であることを示す。
 *島根県教育委員会；島根の教育、各年度版による。

図. 3. 在籍者数の推移(ちえおくれ)



ける在籍者数を、小・中別にあ
らわしたものである。

図4は、同じく1学級あたり
の人数の推移をグラフにしたも
のである。

これらは、島根県教育委員会
発行「島根の教育」の各年度版
をもとにして集計したものであ
るが、同教委発行「教育広報」
に掲載された数値(表7・表8)⁶⁾

図 4. 1学級あたりの平均在籍者数 (ちえおくれ)

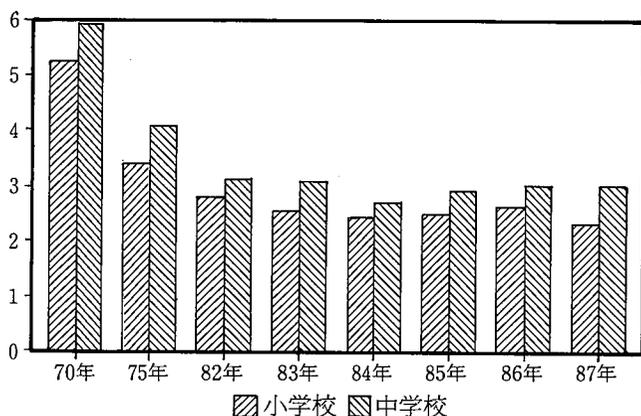


表 7 1学級あたり在籍者数

年度 (S)	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61
小学校	4.6	4.2	3.9	3.6	3.2	2.8	2.8	2.8	2.8	2.6	2.4	2.5	2.3
中学校	5.9	5.8	5.7	4.8	4.5	4.2	3.7	3.5	3.2	3.1	2.8	2.9	3.0

表 8 1学級 3名以下の学級数

年度 (S)		小学校			中学校		
		1人学級	2人学級	3人学級	1人学級	2人学級	3人学級
53	学級数	18	34	28	9	19	9
	%	15.3	28.8	23.7	10.7	22.6	10.7
57	学級数	20	38	30	21	20	8
	%	17.2	32.8	25.9	26.3	25.0	10.0
61	学級数	35	41	17	22	18	11
	%	30.4	35.6	14.7	29.3	24.0	14.6

島根県教育委員会；教育広報(86年8月下)による

とは若干異なっている。

これらを見ると、関係者の間で常々指摘されている減少傾向はたしかにみてとれる。さきの全国との状況と比較してもほぼ同様の傾向がうかがわれる。

1学級あたりの在籍者数は平均すれば2~3名という現状にある。全国的には小学校でほぼ4名、中学校で5名であるから、少人数傾向が顕著である。

表8は、1学級3名以下の学級数である。

小・中いずれもほぼ30%が「1人学級」であり、小学校の場合、3名以下の学級が全学

級の80%を占めている。つまり、ほとんどが3名以下、となっている。

これらを、今年度(87年度)について、より具体的にみるとつぎのようになる。

ちえおくれを対象とする全学級の学年別構成を示したものが表9である。

まず3名以下の学級は、表10、図5によると、小学校で92、中学校で56、全体に占める割合はそれぞれ81%、73%である。

「教育広報」による

「1人学級」は、小学校ではやはり

30%を超えている。小・中いずれも2名の学級が最も多い。

つぎに視点をかえて学年の構成をみると、小学校では2年と3年との間に境界がみいだせる。中学校では2年がピークとなっている(表11、図6-a、図6-b)。

小学校1・2年で相対的に少数であることは、一般に入学当初低学年の時期には学力の遅れが表面化しない、あるいはしばらく経過をみるといったことがいわれているので、それらを反映したものと考えられる。

最後に、在籍者数と深くかかわるものとしてIQの状況を見る(表12)。

これによると、わずかではあるが83年に比べて86年はIQ50以下の子どもの比率が高くなっている。さきにみたような初期の障害児学級在籍者もしくは対象者と比較した場合、IQが低下していることは明らかではあるが、さらに年次別の具体的な変化を追う必要があ

表9 87年度全学級の学年構成 学年別在籍者数(87年度, ちえおくれのみ)
小学校

No.	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計
1					1	1	2
2	1			1		2	4
3			2	1	1		4
4			1	1			2
5			1	1	1		2
6			1	1		2	4
7				1			1
8				3			3
9				1		1	2
10		1					1
11			2				2
12				1			1
13			1			1	2
14	1	1	1				3
15				1			1
16	1			1		1	3
17					1	1	2
18						1	1
19	1		1	1	2		5
20			1	1		1	3
21		1	1				2
22				1	1		2
23	1		2		1		4
24			2		1		3
25		1			2		3
26	1	1			1	2	5
27				2	1	1	4
28	1			1		2	4
29					1	1	2
30	1	1				2	4
31		1	1	1	1		4
32					1	1	2
33				1	1		2
34				2			2
35			1				1
36			1		2		3
37			1		1	1	3
38		1				2	3
39			1				1
40		1					1
41		1					1
42	2			1			3
43			1				1
44					2		2
45	1					1	2
46			1			1	2
47				1	2	2	5
48			1			1	2
49	1	2			1		4
50				1			1
51	1				1		2
52						1	1
53			1				1
54						1	1
55		1	2	1			4
56				1		1	2
57			1			1	2
58	1	1		1	1	1	5

No.	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計
59		1	1				2
60		1	1		1		3
61			1		2	2	5
62				1		1	2
63			1				1
64			1				1
65				1			1
66				1	1		2
67	1	1				1	3
68				1		2	3
69				1			1
70			1		1		2
71			1	1		1	3
72	1		2				3
73			2		1		3
74	2	1		1		1	5
75	1	2	1		2		6
76		1					1
77			1			1	2
78					1	1	2
79				1			1
80			1				1
81						1	1
82				1	1		2
83					1	1	2
84	1	1		2	1		5
85	1						1
86			1				1
87	1			1		1	3
88					1		1
89		1			1		2
90		1		1			2
91		2					2
92						1	1
93			1				1
94				1	1		2
95						1	1
96			1	1			2
97				2			2
98						1	1
99			2				2
100		1					1
101				1			1
102		1	2	2		1	6
103	1	1					2
104	1	1					2
105					1		1
106				1		1	2
107			1			1	2
108						1	1
109		1					1
110			2	1	1	1	5
111			1	2	1		4
112	2			1		1	4
113				1			1
114						2	2
計	26	31	52	55	45	57	266

中学校

No.	1年	2年	3年	計
1	4	2	1	7
2	2	1		3
3	1	2		3
4			1	1
5			2	2
6		2		2
7	3		1	4
8		1	1	2
9	1	1	1	3
10	5	2	2	9
11		1		1
12	1			1
13	1	2		3
14			2	2
15	2	4	1	7
16	4	1	1	6
17	1	2		3
18	1	2	3	6
19		3	5	8
20		1		1
21	1		1	2
22			2	2
23	1	2	2	5
24	3	3		6
25		1		1
26	1		3	4
27	1	1	1	3
28	1	2		3
29	1	4	2	7
30		7		7
31	4		2	6
32	2	1	2	5
33		2		2
34	1	2		3
35	1	3	2	6
36	1	1	3	5
37			1	1
38		1	2	3
39		2	1	3

No.	1年	2年	3年	計
40	2	1		3
41			1	1
42			2	2
43	1	2		3
44	2	1	2	5
45		2		2
46	1	1		2
47	3	1	3	7
48		1		1
49	1			1
50		1	1	2
51			2	2
52	1	5		6
53	1	2	1	4
54		1	2	3
55			1	1
56	1			1
57			1	1
58		1	1	2
59	1			1
60			1	1
61	1	1		2
62		1	1	2
63		2		2
64	1	1		2
65		1		1
66	1	1		2
67		1		1
68			1	1
69	1		1	2
70		1		1
71		1	1	2
72		1	2	3
73	1			1
74	1	1		2
75	1	1	1	3
76	2		5	7
77			1	1
計	67	91	76	234

表10 87年度在籍者数別学級数 (ちえおくれ)

人数	1	2	3	4	5
小学校	35	40	17	12	8
中学校	20	21	15	3	4

人数	6	7	8	9	計
小学校	2	0	0	0	114
中学校	6	6	1	1	77

る。障害児学級がどのような子どもを対象とするのか、従来からその指標としてわが国ではIQがきわめて重要視されてきた経緯があり、今後の障害児学級を考えるうえで無視できないからである。

おわりに

以上、ちえおくれの学級に視点をあてて最近の傾向を中心にみてきたが、やはり結論的には在籍者数の減少傾向、そしてそれともなう1学級あたりの少人数化、さらに障害の重度化を指摘しうる。

ちえおくれを対象とする学級を複数もつ学校は、86年度にはついに姿を消した。

「重度化」のなかみとして、話しことば獲得期前後の子どもが入級している例も実際には少なからず存在する。本来ならば養護学校の対象児であるが、養護学校が遠方にあり親としては自宅から通学させたいなどの理由によることも多い。そのような子どもには、いわゆる1対1の指導を重視することも時には必要であり、その意味

図. 5. 87年度在籍者数別学級数

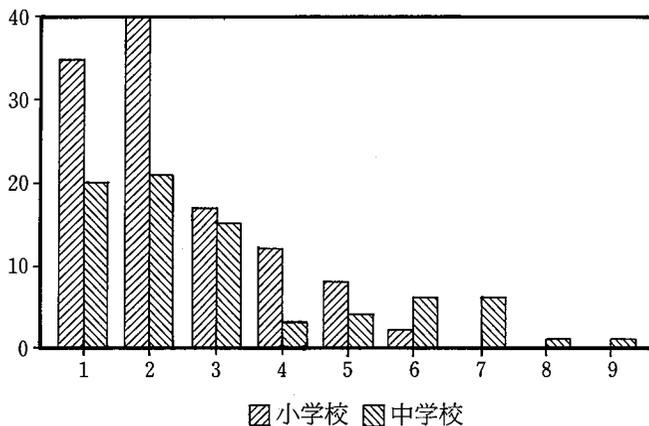


表11 学年別在籍者数および全体に占める割合(87年度)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計
小学校	26	31	52	55	45	57	266
	9.8	11.7	19.5	20.7	16.9	21.4	100%
中学校	67	91	76				234
	28.6	38.9	32.5				100%

図. 6-a. 87年度在籍者数(小学校)

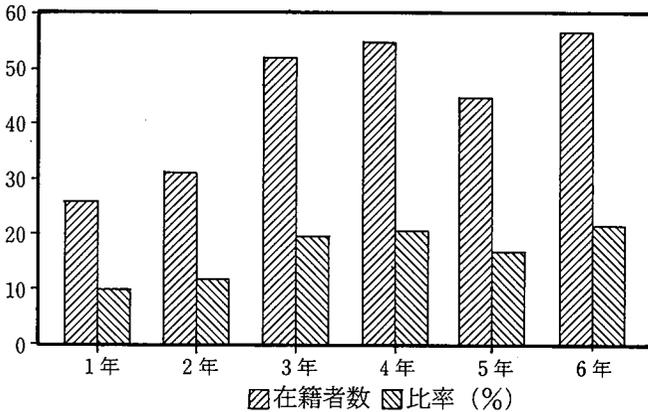
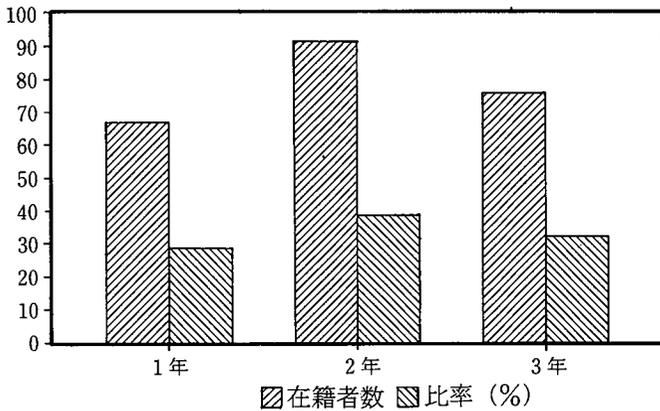


図. 6-b. 87年度在籍者数(中学校)



では必ずしも「1人学級」そのものを否定的に評価することは正しくない。しかしその場合、他に、特別のてだてをくわえるべき対象児がいても「いくらなんでもあのような子どもと同列にされてはかなわない」といったかたちで入級が敬遠され、したがって、重度の子どもを受け入れるという積極的な姿勢が結果的には「1人学級」化を招来するという矛盾した姿も、最近では珍しくない。

ここにあげた数字からは、他にも多くのことが読みとれるのであるが、具体的な考察については別稿にゆずるとし、歴史的経緯および今日の状況を概観するにとどめて本稿をしめくくる。

表12 IQの分布

(単位: 上=%, 下=人)

校種	IQ								
	不能	~ 25	26~50	51~75	76~85	86~100	101~	不明	計
小学校	4.7	—	17.8	44.8	8.5	4.4	2.0	17.8	100.0
	7.0	—	24.1	45.9	4.4	4.1	0.7	13.7	100.0
	14	0	53	133	25	13	6	53	297
中学校	0.9	0.9	19.2	55.0	-12.7	4.4	0.4	6.5	100.0
	4.4	—	28.6	49.8	8.8	4.0	—	4.4	100.0
	2	2	44	126	29	10	1	15	229
計	10	0	65	113	20	9	0	10	227
	3.0	0.4	18.5	49.2	10.3	4.4	1.3	12.9	100.0
	5.8	—	26.2	47.7	6.4	4.0	0.4	9.5	100.0
	16	2	97	259	54	23	7	68	526
	29	0	130	237	32	20	2	47	497

(上段83年度, 下段86年度)

注および参考文献

- 1) 大久保哲夫, 若槻喜保; 精神薄弱児特殊学級に関する研究(Ⅰ), 島根大学教育学部紀要(教育科学), 第4巻, P. 21, 1970
- 2) 上田節夫; 島根県における特殊学級(精神薄弱児)の実態調査とその考察, 島根県教育研究所研究紀要, 第21集, pp.34-68, 1961
以下, 上田の引用はこの文献による。
- 3) 門脇 裕, 東条幹男, 石田啓子; 特殊学級教育の振興について-学校教育・家庭教育・社会教育の側面から-, 島根大学教育学部専攻科修了研究, pp.311-315, 1973
- 4) 浜田市原井小学校; 精神薄弱児指導の一
場面, 教育月報 1952, 8月号, pp.29-30, 島根県教育委員会
- 5) 高木芳子; 特殊学級経営1年を経て, 教育月報 1955, 1月号, P.24, 島根県教育委員会
- 6) 表7, 表8は下記により合成もしくは転写したものである。
島根県教育委員会; 教育広報, 1984, 5月(下)号, P.6
同上, 1986, 8月(下)号, P.5
- 7) 87年度についてはつぎの資料にもとづいて集計した。
島根県教育委員会; 島根県の特種教育, 1987